

次の文を読み、次の問1～2に答えよ。

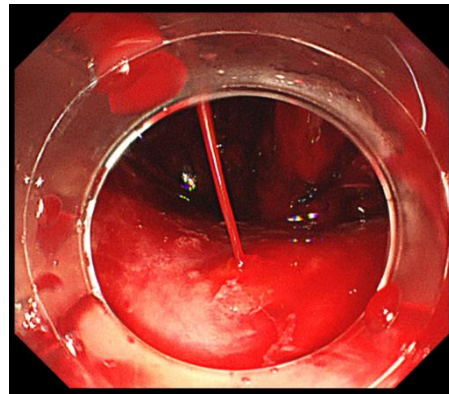
70代歳の男性。2年前に狭心症のカテーテル治療を行い、以後、アスピリンの内服を継続している。昨夜より食欲がなく、上腹部痛があったが、今朝タール便があり、その後帰室したところ吐血したため救急要請した。これまでに内視鏡検査を受けたことはない。

身長 164 cm, 体重 46 kg. 体温 37.3 °C, 心拍数 73 /分, 血圧 101/68 mmHg. 呼吸数 16 /分. 身体所見：嘔気が持続し、心窩部痛あり。眼球結膜に貧血を認める。直腸診でタール便を認める。血液所見：ヘモグロビン 9.0 g/dL, 血小板 11.8 万/ μ L. 血液生化学所見：尿素窒素 62 mg/dL, クレアチニン 0.70 mg/dL, Na 139 mEq/L, K 3.8 mEq/L, Cl 110 mEq/L, CRP 0.30 mg/dl. 上部消化管内視鏡検査で胃体上部小弯に多発性潰瘍を認めた (図1)。

問1. 図1の写真でみられるのはどれか。正しいものを1つ選べ。

- a. 噴出性出血
- b. 湧出性出血
- c. 非出血性露出血管
- d. 血餅付着
- e. 黒色潰瘍底

図1.



問2. 本症例に対する治療において最も適切ではない手技はどれか。1つ選べ。

- a. 高張食塩水エピネフリン液局注
- b. PPI 内服
- c. 内視鏡クリップ
- d. 高周波凝固
- e. 内視鏡的静脈瘤結紮術

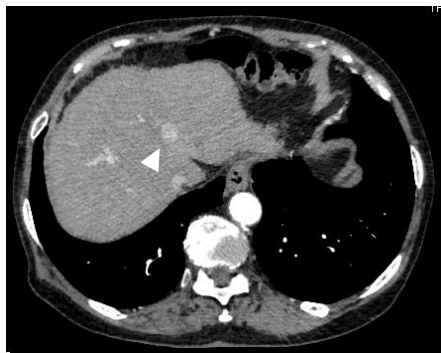
次の文を読み、次の問1～2に答えよ。

70代歳の女性。20年前から慢性C型肝炎に対し定期的に通院していた。腹部造影ダイナミックCT検査で肝臓のS4区域に30mm大の腫瘤が指摘され、精査加療目的に入院となった。

身長 147 cm, 体重 49 kg. 体温 37.5 °C, 心拍数 73 /分, 血圧 148/66 mmHg. 身体所見：腹水徴候はなく、四肢に浮腫は認めない。肝性脳症を示唆する所見はない。血液所見：ヘモグロビン 10.1 g/dL, 白血球 4480 / μ L, 血小板 7.2 万/ μ L. 血液生化学所見：アルブミン 3.5 g/dL, 尿素窒素 24 mg/dL, クレアチニン 1.05 mg/dL, 総ビリルビン 0.4 mg/dl, PT 90%.

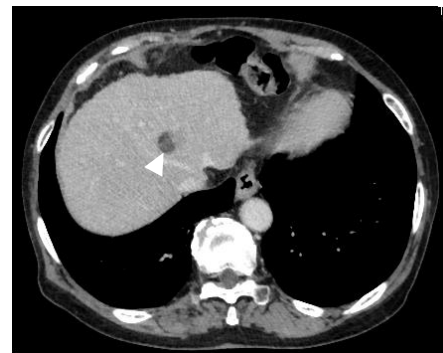
内服は降圧薬と分岐鎖アミノ酸製剤を継続している。

図1.



動脈相

図2.



門脈相

問1. 以下の血液検査項目のうち、本症例の診断において最も有用なものはどれか。2つ選べ。

- a. PIVKA-II
- b. CA 19-9
- c. CEA
- d. AFP
- e. CA 125

肝動脈化学塞栓療法後、一週間後に腹部膨満感が出現した。脳症は認めない。その時のCT画像を示す(図3)。追加血液検査：アルブミン 2.3 g/dL,

問2. 本症例にまず用いる薬剤のうち、正しいものはどれか。2つ選べ。

- a. ラクツロース
- b. アミノレバン点滴
- c. カナマイシン
- d. アルブミン製剤
- e. スピロノラクトン

図3.

